平成10年3月17日 第3種郵便物認可
平成18年10月20日発行（4月・7月・10月・1月各20日発行）

豊橋市美術博物館友の会だより－2006年－秋号
Vol.62
FU-HAKU
Autumn 2006

豊橋市制施行100周年記念展　豊橋市美術博物館所蔵「絵画名品100選」より
芥川沙織〈民話より〉1954年

TOMO no KAI NEWS

FU風伯HAKU

Toyohashi City Art Museum

展覧会紹介

ー市制施行100周年記念展ー

豊橋市美術博物館所蔵　絵画名品100選

～11/5（日）まで ●入場無料

大森運夫（聞春）

森清治郎（日本の民家）

この展覧会は市制施行100周年を記念し、当館のコレクションより100点の絵画を厳選して一堂に展観しています。スケールの大きい作品や新たな収蔵作品などに触れるまたとない機会です。見所としては、中村正義の《窮泉》（前号掲載）や大森運夫《佐渡冥界の譜》などの大作をはじめ、保管転換（豊橋市旧蔵）された森清治郎《日本の民家》や我妻碧宇《山ゆたかに》があげられるでしょう。白井烟嵐《雲行雨施》（前号掲載）および遠山唯一《支度》は修復を終えてこのたび初のお披露目です。また、当館のコレクションには具象作品が数多く収蔵されている印象がありますが、荒川修作・浅野弥衛・久野真・味岡伸太郎・松井守男といった現代作家の抽象作品も今回の見所のひとつです。

会期中には、美術講座やボランティア・ガイドをはじめ、出品作品の中から人気の高い上位10点をアンケートで選び出す「絵画名品ベスト10」の記念イベントも行います。収蔵絵画や作家についての関心を深め、親しむ機会となれば幸いです。

◇ 美術講座④

10月28日（土）午後2時～　美術博物館講義室

「星野眞吾と中村正義」

＊講師は豊橋市美術博物館学芸員。美術講座①～③はすでに終了いたしました。

◇ ボランティア・ガイド

土曜日を除く毎日2回（午後2時～，午後3時～）

◇ 絵画名品ベスト10

会場で好きな作品1点を選び，ご応募ください。会期終了後に上位10点を記念絵はがき（10枚セット）にいたします。抽選により応募者から100名様に絵はがきセットをプレゼント（抽選の発表は発送をもってかえさせていただきます）。

東海道の城下町展Ⅱ

～11/19（日）まで

会場●二川宿本陣資料館

見逃せない！この作品

《東海道五拾三次之内 桑名》保永堂版　歌川広重（桑名市博物館蔵）

《三之丸城ノ腰物見隅櫓》（個人提供）

東海道には箱根、鈴鹿など険しい峠もあるが、中山道などと比べれば、海に面した比較的平坦な街道であった。そのうち宮から桑名までは、海上七里の渡しの海路であった。

東海道シリーズの浮世絵は数多く知られているが、《桑名》では桑名城がよく取り上げられ、主に二つのパターンで描かれた。一つはこの保永堂版のように、七里の渡し口近くから〈三の丸物見櫓〉と〈蟠龍櫓〉を大きく捉えたもの、もう一つは、海上から遠方に櫓群を望むものである。桑名城には実に51もの櫓があった。海上から眺めた姿はさぞ壮観であったろう。

今回の展覧会では、城が写った古写真もあわせて紹介しており、桑名城の古写真の中には浮世絵に描かれた〈三の丸物見櫓〉を写したものがある。浮世絵と並べて展示しているので、比較してみるのも面白い。《亀山》についても有名な雪景色の浮世絵を紹介しているが、こちらも同様に、浮世絵に描かれた亀山城の〈京口門〉の古写真を並べて展示している。

美術ファンにとってはおなじみの浮世絵ばかりだが、モティーフとなった場所を明治期の古写真と比べられるのが本展の見どころのひとつである。広重が見たであろう城の姿を、この機会に確認してはいかがだろう。

（豊橋市二川宿本陣資料館学芸員　高橋洋充）

12/17に行われる
アイプラザ豊橋公演
のステージイメージ

友の会創立 20 周年記念イベント

モーツァルト作曲 オペラ 魔笛（まてき）のうらのてき

総合芸術オペラを美術博物館の視点から見た企画

友の会事業部報告

開場前の受付設営する友の会理事と
開場を待ちわびるお客様の長蛇の列

さわやかな秋晴れの下、10 月 8 日豊橋市民文化会館ホールにて、豊橋市美術博物館友の会と豊橋市民オペラ実行委員会の共催による「モーツァルト作曲 オペラ魔笛のうらのてき」が催された。

この企画は、今年 12 月 17 日にアイプラザ豊橋にて上演される「魔笛」を美術博物館の視点から見る、という趣旨で始まった。

オペラは音楽を楽しむ以外にも、舞台装置、衣装、などの視点から美術的に楽しむことができる総合芸術である。ステージではモーツァルトと妻コンスタンツェに扮した二人の軽快な司会と共に、オペラ本番の衣装やイメージされた衣装を着たソリスト達による「魔笛」の抜粋が披露された。

華やかな衣装のソリストの方々

また、ステージの背景には様々な資料の他にドイツの画家であるミヒャエル・ゾーバの描いた「魔笛」の絵画を投影し、オペラと美術の世界を存分にお楽しみいただけたのではないだろうか。

ソリストの皆様には素敵な歌をご披露していただいた後にオペラの本番に向けた意気込みを中心に様々な楽しいトークを展開していただき、満席の観客は深くうなずき、メモをとり、また笑ったりと会場の空気は終始和やかであった。

今回のステージの企画制作演出を手がけてくださいました中部日本放送副理事長の何川高氏を初め、ご協力いただいた多くの方々に心からのお礼を申し上げると共に、豊橋に新しい芸術の世界が誕生したことを心から祝したい。

今後も、美術博物館から見た音楽の世界を様々な思考を凝らしながらお届けし続けていけるように努力していきたいと考えている。この街が芸術の都になる事を願いながら。

司会の小松蘭さん(左)と
伊藤雅子さん(右)

ミヒャエル・ゾーバの絵を背景に進んだステージもお客様の盛大なスタンディングオベーションに包まれながら終了

—夢想の世界を花鳥画に—

「上村淳之画伯をたずねて」

「日本画にみる富士と桜」の展覧会中に開催された、上村画伯の記念講演会のお話をもっと深めたいとお願いしましたところ、快くインタビューに応じてくださいました。奈良市西部の豊かな潅木のなかに、白い瀟洒な松伯美術館があります。ここで館長も務められる上村淳之画伯にお話を伺いました。

日本画とは何でしょうか

古くから壁面や器物の装飾などには様々なものが描かれてきましたが、絵画としては奈良朝時代に中国から伝わり、平安時代になって公家の文化と融合、熟成されて、日本独自の絵画を構築してきました。

明治に入り、西洋文化の導入が盛んとなり初めて、西洋画との違いを示す、日本画という固有名詞が生まれました。

昔から洋の東西と表現するように、それらが相容れざる要素を持って発展してきたものであろうと考えられます。それはひとえに、その地にその人種によって育まれた、感性の相違であると思われます。

日本画の特徴である“余白”についてお伺いします

日本文化の伝統の領域を守る、能、舞にも見られる様に、無表情な背景の前にそれぞれの世界を構築してゆくのと同じで、中国を起源とする日本画には余白という具体性を伴わぬ空間が重要な色面として使われます。

具体物を取り除いた空間は、いわば象徴空間。したがってそこに描かれているものも象徴的でなければなりません。しかしそこに象徴化された空間とはいえ、リアリティを色濃く具えたものでなければ観る人を表された空間に誘い入れる事が出来ず、空虚なものとなるはずであります。

東洋画と西洋画の違いは何でしょうか

前述のように、象徴表現が東洋画の特質であり、自然描写の中に余白という具体性を伴わぬ色面に重要な意味を持つのは東アジアの中の日本画。そして今一つ、花鳥画というジャンルは東アジアの文化にしか存在しない事です。自然の現象をそれらと同じ目線で捉え、そこに不思議、神秘の世界を感知して花鳥画は出来ますが、対象を上から見下ろしてしまえば生態画の域を出る事は出来ません。

人物を描きたいとは常々思っていたのですが、例えば『源頼朝像』のようにやや様式化の強い表現が多く、もっと自然体に立った、しかも象徴的表現をイタリア・フィレンツェの教会に描かれたフラ・アンジェリコのマリア像に見出し、実物大の模写を致しました。

マリアの衣の線は美しく、模写の中で一番難しいところでもありましたし、祖母上村松園と全く同質のものを感じました。

今のご心境と日本画のこれからについて

人物画は人格を表現できなければならないのですが、今、西本願寺の依頼で親鸞像を手がけています。祈りの世界——これは人間の在るべき姿を追い求めるという事にもなりましょう。

戦後、長い混乱の時代がありましたけれど、日本画の軸足は変わっていません。世界の人種間の融合は可能ですが、お互いに異文化を認め合い、それぞれのものを大切にしなければという風潮もようやく生まれてきているようです。

唳禽荘（れいきんそう） ―鳥と暮らし、鳥を描く―

緑の木々に囲まれた広大なお屋敷の門をくぐり、丘陵を下っていきますと、ゆったりと水鳥達の憩う池がありました。ほとりにはタンチョウヅルがたたずんで毛繕いをしており、小高い山からもう一羽がゆっくりとおりてきました。「あれ？いま私達はどこにいるのかしら。」と、一瞬とまどう雰囲気でした。

庭伝いに画伯のあとに従いますと、気楽にアトリエに招じいれてくださり恐縮してしまいました。制作中の下絵がかけられた壁面以外の高い天井には、多くの鳥達の剥製が飾られ、さながら鳥の博物館といった様子でした。枝に止まった形が今にも飛び立ちそうな鳥、中でも目立ったのは片羽を広げて止められている薄ピンク色のショウジョウトキでした。これら死んだ鳥達は、羽の裏まで観察できる大切なモデルだそうです。大きな窓からは、自然の姿で木々を飛び交う鳥達が眺められ、美声を発してさえずり飛んでいるのはサンコウチョウとか、本当に珍しい風景でした。鳥のさえずりが遠く近くに絶え間なく聞こえるアトリエで、雌を惹きつけるために美しい羽を持ったり、体をふくらませたり、踊ったりする雄の生態の話を伺っていますと、おもしろく興味は尽きませんでした。また、出していただいたコーヒーはおいしく、高揚した私達の気持ちを心地よく落ち着かせてくれました。

庭に出ますと、地下80メートルの井戸からわき出る水を循環させている疎水に沿って、鳥の生態系に応じて作られたたくさんの鳥小屋がありました。この広い敷地の中には、1300羽以上280種位の鳥が飼われているそうです。セイタカシギの雛から成長していく姿が、鳥小屋を移っていくごとに観察できます。ふわふわした産毛の雛を抱かせていただきましたが、その可愛いかったこと。飼われている鳥は、人を恐れない優しい目をしているそうです。自然の環境を保った小屋では、多くの野生の鳥達が同居し共存しています。えさが豊富なら狭い範囲でも争わず、それぞれのテリトリーを守り、習性ごとに棲み分けるそうです。現在の競争社会で忘れられ排除されていく、生きるための秩序がここでは保たれているのです。

画伯の清んだお声や優しい眼差しは、日々この鳥達との生活の中でより深化され、絵の中に投影されているのだと、勝手に得心し感動しました。さらに進んでいきますとクジャク小屋があり、真っ白なクジャクが幾羽もおりました。崖にはカワセミが巣造りをした穴が無数に開いていたり、ベニコジュケイ、ヤマガラ、コゲラ、セキレイ、シロキジ、オオルリのほか、名も知らない鳥達がそこかしこにいました。春に渡りをした鳥達は白夜の世界で成長の早い子育てをして、9月20日に子供を連れて帰ってくるそうです。

突然のことながら画伯のご好意で見学させていただきました。迷ってしまいそうな庭園の中の一部でしたが、時間も忘れて楽しいひと時を過ごさせていただきました。

（風伯編集部）

会員の声

友から友へ Members to Members

自分流「絵」を巡る楽しみ　佐久間雅子　(867)

美術館に造詣が深い訳でも、熱心に美術館通いする方でもないが、今年はアトリエ訪問のチャンスに恵まれた。2月、仕事の研修で上京した際、表参道脇を入った岡本太郎記念館。等身大太郎フィギアが迎えてくれた。玄関上がり端で求めた太郎顔2個付きのキーホルダーは金具を取り替えステキなイヤリングに変身している。実は、併設するカフェでのケーキとコーヒーがお目当だったのだが時間がなくて断念した。

5月には友の会主催の野田弘志画伯のアトリエ見学。17年前、当館での作品展の折、鉛筆で描き切る作品に感動し、早速書店で画集を手に入れた。小品「むくげ」の模写の真似事までした。今回はその画集を持参して、サインを頂き、宝物の1つとなった。

最近話題の「ダ・ヴィンチ・コード」、あまり流行ものは追わないが、表紙のモナリザの魔力には終に負けて買ってしまった。他にも商業デザイナーとして活動していたという松本清張の「天才画の女」、美術館勤務経験のある高橋克彦「写楽殺人事件」や篠田節子「贋作師」等々、絵画にまつわるミステリー小説は沢山ある。

最後に残念に思うことを。10年程前訪れた鎌倉駅前のダリ宝飾館。秋葉原の電気屋さんのコレクションで素晴らしい貴重な作品だった。既に閉館されているようだ。今あの作品群は何処に行ってしまったのだろう…。

『ふれでぃーの美術日記』　ふれでぃー山崎　(1249)

○月×日　風心地好し

心身快調。持病の腰痛もなし。美術館めぐりへ行こう。

以前、東京ステーションギャラリーで、「難波田史男展」があったが、体調悪く見逃していた。長男が見に行き、図録を買ってきてくれる。(…いい！) 父親の難波田龍起の作品よりも、何かを感じる。

次男が西新宿の初台に下宿しており、近くに「東京オペラシティアートギャラリー」があり、難波田史男の作品が常設されている。そこで、今回の美術館巡りは「東京オペラ…」と決める。女房と二人、新幹線で東京へ。新宿で次男と落ち合い、さっそくギャラリーへ。

「難波田史男」の生の作品を目の当たりにして…(声なし) すばらしい。心が振えてやまない。絶対的平和主義者で絶対的理想主義者の彼の内面のイメージが、キャンバスに具体的な線と色彩とを持って表出されている。現実の世界に絶望した時、彼は自身の内側へと深く沈潜していく。クレーが言う(現実世界が過酷になればなる程、絵画は抽象になる)と。

次男のアパートの大家さんに挨拶へ。部屋の壁に興味を引かれる作品が飾ってある。(あ、それは私の兄のなんですよ。吉野辰海と言います) 吉野辰海：武蔵野美大出身。赤瀬川順平や秋山祐徳太子らとグループ展。独特な犬の彫刻で有名。さすがに東京だ…と思う。

立　山　に　て　堀田幸世　(268)

這松の緑と残雪の白を水面にくっきりと写して「ミクリが池」は深い群青色の水をたたえて静まりかえっています。目の下に広がる神秘的な景色の美しさに、声も出せない感動でしばらく動けずに、ただ見つめるばかり。8月5日の立山は快晴。照りつける日差しはキラキラとまぶしく真夏の光を注いでいますが、山に残る雪渓から吹く風が、襟元の汗をすぐに吹き飛ばしてくれます。足元には紅や白、黄色、紫、様々の高山植物が咲き、青い松ぼっくりをつけた這松の根元には、雷鳥の巣作りを脅かさないようにとの注意書きもあって、ここは標高2450メートルの空堂遊歩道です。

約1時間のコースをたどると、カメラとビデオに夢中の夫と歩けば、その2倍の時間がかかってしまう。高山に弱い体質の私にはそれが幸い。雪渓の雪を手に取れば、ザラザラと大きな結晶。夏の雪は、白馬で1度、カナダのアサバスカ氷河で2度、この立山で3度めかな。薄い空気と気圧の低さで、少しの動悸と目まい。いや、感動がさせる事かも。ふと、水越武写真展を思い出す。いくつかの見覚えのある風景と、想像の中でしか知る事の無い大自然の姿。体験が深める感動の大きさ。あらためて、地球という惑星の神秘を感じ、この星に生きる意味を問い直す思いと共に、満ち足りた時間を過ごすことが出来ました。

豊橋市美術博物館シンポジウム

「豊橋市にとって魅力ある美術館・博物館とは」

▼去る８月３０日（土）、市役所講堂において、「豊橋市美術博物館シンポジウム」が開催されました。シンポジウムでは、「豊橋市にとって魅力ある美術館・博物館とは」を大きなテーマとして、美術博物館設計者選定手法等検討委員会委員長であった早稲田大学教授の中川武さんをコーディネーターに、また、今話題の金沢２１世紀美術館館長の蓑豊さん、そしてそれを設計した建築家の妹島和世さんと西沢立衛さんをパネリストとしてお迎えし、定員１５０人のところ、２００人もの満員の聴衆を前に意見発表とパネルディスカッションが行われました。▼昨今の地方を取り巻く非常に厳しい財政環境の中で、早期に新しい美術博物館を建設することはできない状況になっていることは皆さんご案内のとおりですが、そのことは私たちに与えられた大きなチャンスでもあります。この機会に、長期的な視点に立ち将来を見つめ、これからの美術館・博物館はどうあるべきかを今一度、みんなで深く考えそして、議論しその議論の輪を更に大きく広げていこうという思いから今回のシンポジウムが開催されました。▼第１部では、中川教授による「美術館・博物館建築の今」をテーマに世界の美術館の動向から市民と公共建築のあり方についてまでお話ししていただきました。また、蓑館長と妹島、西沢両氏には、「魅力ある美術館・

博物館」をテーマに、驚異的な入館者数とそれに伴う地元商店街への大きな経済波及効果を生みだしている金沢２１世紀美術館の運営方針と建設コンセプトの両面から検証を行いました。特に蓑館長からは、アメリカでの経験をもとに、「これから日本を担う子どもたちが、美術館・博物館を訪れて感性を磨くことが重要」と、妹島さんからは、「無料で参加、体験できるパブリックスペースが重要」と豊橋市美術博物館の将来像を探るヒントをいただきました。▼第２部では、「豊橋市にとって魅力ある美術館・博物館とは」をテーマに中川教授のコーディネートでパネルディスカッションを行い、各パネリストから貴重なご意見をいただきました。また、時間に制約はありましたが、参加者からの質問にもそれぞれの講師から丁寧な回答をいただくことができました。その中で特に、蓑館長からは、「熱意のある館長と有能な学芸員が、地方都市と思わずプライドを持って運営していけば、世界的な作家の作品も並べられる」と強調され、西沢さんからは、金沢２１世紀美術館がオープンした際に、地域全体が盛り上がったことを例に挙げ「市民がどう施設を受け入れ、どう盛り上げていくかが大切」と市民の支援を呼びかけてくださいました。▼最後に蓑館長から「『こんな美術博物館を作りたい』という情熱をもったリーダーを中心に、市民が自然に集まるような美術博物館を作ってほしい」と力強いメッセージをいただきました。

（左から）中川武氏、西沢立衛氏、妹島和世氏、蓑豊氏、加藤教育長、金原館長、堀内部長

収蔵品紹介

[葡萄栗鼠]

松林桂月●MATSUBAYASHI,Keigetsu (1876-1963)
昭和11年（1936）紙本着彩
199.0cm × 446.0cm　六曲一隻屏風

松林桂月は、明治9年に山口県萩市に生まれ、本名を伊藤篤という。幼い頃から絵を好み、明治27年18歳のときに、当時帝室技芸員として活躍していた野口幽谷に入門した。話は少々逸れるが、幽谷も幼少時から絵を好み、この地方とも縁浅からぬ渡辺崋山の弟子・椿椿山や円山四条派に学んだ原田圭岳に師事している。さらに桂月のもとでは豊橋出身の白井烟嵐や遠山唯一が学んでおり、ここに連綿と続くひとつの画譜をみることができよう。

さて、明治31年の幽谷没後、桂月は独学で制作を続け、日本美術協会展などへ精緻な画風の作品を出品、また、34年には同じ幽谷塾に学んだ閨秀画家・松林雪貞と結婚し、松林姓を名乗った。明治40年に文部省美術展覧会（文展）が開設されると、江戸時代から続く南画の近代化に努め、文展、帝展などを舞台に水墨表現の可能性を追求した作品を発表し、近代日本画史に［春宵花影図］（東京国立近代美術館蔵）などの優品を遺した。

葡萄や栗鼠は、桂月が特に好んで描いたモティーフのひとつで、初期から晩年に至るまで幾度となく作品に登場している。この絵では、竹に絡みついた葡萄の蔓が左下へ伸びながら、右手の倒れるようにしなる竹に再び巻きつき、視線が右から左へ流れるような構図をとっている。竹の剛健な直線と、蔓の繊細な曲線が対照的に描かれ、中央の不安定な蔓を走る栗鼠が画面に動感を添えている。東洋画特有の表現である背景の余白からは、空間的な広がりや余韻といったものを感じとることができよう。葡萄の葉などには、桂月が得意とした"たらし込み"の技法が使われ、微妙なにじみによる墨の濃淡が作品に写実性、近代性を与えている。画面右下に〈昭和丙子春晩写　桂月山人篤〉の年記と落款があり、昭和11年の制作であることがわかる。

（豊橋市美術博物館学芸員　岡田豆世）

＊〈葡萄栗鼠〉は、「絵画名品100選」展で11/5まで展示されています。

編集後記

■　豊橋市美術博物館友の会は、市制施行100周年という記念すべき年に創立20周年を迎え、さまざまな魅力ある企画に取り組んでいる。その中の一つに研修旅行がある。

国内研修は春・秋に日帰りと一泊があり、会員相互の親睦を図りながら楽しく旅をしてきた。今年の春は北海道の野田弘志画伯を訪ねた2泊3日の研修であった。秋の日帰り研修は奈良を予定している。

また、海外研修も4回目を迎えることができ、第1回目は10周年で、「ウィーン・ロンドン」（春）、「南仏・パリ」（秋）、2回目は15周年で、「敦煌・西安・上海」、3回目は特別研修で、アメリカの姉妹都市トリードとの交換展の開場式にも参列した、「トリード美術館・デトロイト・ボストン・ニューヨーク」、4回目は今年20周年で、「ドレスデン（ドイツ）・パリ」に。すでに金原館長より友の会講座で、「バルビゾンへの道」「パリの美術館」と題して2回の事前レクチャーをいただいての海外研修である。多くの国の美術館を訪問し、本物の絵画に出会い、一歩踏み込んだ研修をと心がけている。今回の成果は、次号の『風伯』にてお知らせしたい。乞うご期待!!

（風伯編集部）

豊橋市美術博物館 友の会だより「風伯」第62号 発行人・発行所／豊橋市美術博物館友の会 〒440-0801 豊橋市今橋町3-1 TEL.0532-51-2882　平成18年10月20日発行（4月・7月・10月・1月各20日発行）　平成10年3月17日／第3種郵便物認可　定価200円
※会員は会費に含みます。※定価には消費税が含まれます。